

「帰属するエスニシティを徹底化しない戦術」の考察

——日本在住韓国系ニューカマー二世世代の事例から——

今 里 基

(立命館大学先端総合学術研究科)

日本には約50万人の在日コリアンが居住し、うち約15万人が「韓国系ニューカマー」と呼ばれる1980年代以降に来日した韓国人である。現在ではその子供である二世世代も生まれ、成人を超える時期となった。彼／彼女らを含む在日コリアンに関するアイデンティティに関する研究は蓄積がなされたものの、大部分はオールドカマーが対象で、エスニックアイデンティティに関してどう守ってきたか、あるいはどう維持してきたかについて考察、批判したものであった。本稿では韓国系ニューカマー二世世代の女性を対象に、その育ちの過程に着目し、彼女らが自らのアイデンティティの自己規定に関して、どのような戦術を取っているかに着目した。調査手法はニューカマー二世世代の2名の大学生にインタビューを行い、その語りを分析する手法を用いた。結果、彼女らがマジョリティから他者化されるような経験があったとしても、それに対し意識的に深く与しない様子を見ることができた。本稿ではそれを「帰属するエスニシティを徹底化しない戦術」と名付け、当事者が同じ韓国というルーツを持つオールドカマーとは異なるナショナリティやエスニシティとの距離の置き方をすることを明らかにした。

キーワード：ニューカマー、アイデンティティ、戦術、在日コリアン、二世世代

立命館人間科学研究, No.38, 15-29, 2019.

はじめに

法務省の「在留外国人統計」によれば、日本には2017年6月末現在、韓国籍及び朝鮮籍の者が合計で48万4627人いるとされる¹⁾。そのうち1945年の太平洋戦争終結前に朝鮮半島から日本へ渡った者及びその子孫を指す「特別永住者」は韓国籍及び朝鮮籍を併せて33万537人存在する。本稿ではそれ以外の韓国人を指す「韓国系ニューカマー」の二世世代に着目する。

韓国系ニューカマー二世世代とは韓国系

ニューカマーのうち、両親が共に韓国人から生まれた子供を指す²⁾。彼／彼女らは後述するオールドカマー³⁾に関する研究の蓄積に比して、十分に光が当てられてこなかった。韓国系ニューカマーに関しては、教育戦略や母語継承の観点における研究が存在する。例えば、韓国学校へ親（第一世代）が子を通学させる理由と文化継承に関する論考（朴 2010）や、母語や文化の継承に関する論考（金・安本（2011）；安本（2013）；安本（2016））などである。しかし、あくまでも

1) 法務省 在留外国人統計（2018年2月26日取得）
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

2) これは狭義の意味であり、広義の意味では日韓ダブルもニューカマーの二世世代として含む。

3) 本稿では特に断りが無い限り、概ね1980年代以降に来日した外国人及びその子孫をニューカマー、戦前に朝鮮半島や台湾などから日本へ渡ってきた者及びその子孫をオールドカマーと表記する。

親世代を対象とした研究であり、子どもである第二世代は間接的な対象にすぎない。第二世代に関する研究で、その当事者に直接的にアプローチしたものは、管見する限り見られない。韓国系ニューカマー第二世代が見過ごされてきた理由として、金・安本（2011）は、以下のように述べている。

日本語能力、不就学、進学などの社会／学校側からの課題は、中国帰国児童生徒や日系南米人が主な対象とされ、数的にも少なく、特に大きな問題を抱えていないと認識されていた韓国人ニューカマーはその対象から外された。（金花芬・安本博司 2011:27）

このように韓国系ニューカマーの第二世代は、他のニューカマーの中でも言語習得や進学等の社会問題において問題がないとされてきた。文部科学省の統計では、韓国・朝鮮語を母語とする児童のうち日本語支援が必要な者や不就学の者は非常に少ない⁴⁾。また、是川（2012）は日本の定住外国人の第二世代の高校進学率の分析を行い、日本人の高校への進学率は97%である一方、韓国・朝鮮の者の進学率は93%であると指摘している。中国からの移住者が85.7%、フィリピンが59.7%、ブラジルが42.2%であるのに比べると、確かに韓国・朝鮮の移民の就学率が高い（是川 2012:11）。是川が分析で用いた統計データは国勢調査であるため、特別永住者とそれ以外の者が厳密に区別されていないという限界がある。しかし、韓国・朝鮮籍全体の人口から特別永住者を除いた割合を仮に韓国系ニュー

カマーとした場合⁵⁾、在留外国人統計（旧登録外国人統計）上1995年12月末現在で15.3%だった割合が2017年6月末現在では31.8%まで上昇した。それを踏まえても93%という高い進学率は、韓国系ニューカマー第二世代が日本社会にある程度適応している結果を示している。

このように日本社会や学校等への適応力が高いゆえ、韓国系ニューカマー第二世代は、研究においても社会的にも「見えざるマイノリティ」となっている。本稿では、このような日本のコリアン研究および教育社会学や社会学のマイノリティ研究からこぼれ落ちてきた韓国系ニューカマー第二世代の自己規定のあり方について考察することを目的とする。

さて、先に触れたように韓国系ニューカマー第二世代のアイデンティティを論じるうえで重要な比較対象に、同じく韓国にルーツをもつオールドカマーの存在がある。オールドカマーを対象にした研究では、アイデンティティをめぐる議論にかなりの蓄積がある。例えば、福岡（1993）は、インタビューによる質的調査を通じて、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティを「同化」か「異化」の二分法に限らず、「葛藤回避タイプ」「葛藤タイプ」「共生志向タイプ」「同胞志向タイプ」「祖国志向タイプ」「個人志向タイプ」「帰化志向タイプ」の7つに分類できると示した。この福岡（1993）の分類の有効性を在日韓国人の若者へのアンケートを用いた調査から検証したが、福岡・金（1997）である。各タイプの存在を量的に示した上で、実際にはこれらのタイプが個々人の中で複数に連関していることを示した。

福岡・金は、民族団体の活動やイデオロギー闘争等によってオールドカマーに関する実態調査が長年なされないまま、しばしば彼らが一枚岩的かつ「民族本質主義」的に扱われることに

4) 2016年の文部科学省の統計では韓国・朝鮮語を母語とする児童・生徒のうち日本語指導が必要な者は627人とされる。これは、日本語指導が必要な外国人児童全体の3万4335人のわずか1.82%である。文部科学省（2017）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」の結果について。（2017年11月16日取得 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf）

5) ビザの手続きなどのミスで特別永住者だったオールドカマーが特別永住者の資格を失い、定住者になった者もわずかながら存在するため、「仮に」という表記を取っている。

問題意識を抱き、定量調査を行った（福岡・金 1997:2-4）。そして上述したアイデンティティの多様性や個人の中の複数のアイデンティティの連関を示したが、却ってエスニックアイデンティティ（民族性）の薄さ／濃さの指標のように扱われることにもつながってしまった（cf. 山脇 2000）。李（2016）は、こうした福岡・金らの議論は、「民族性の虚弱という単線的な理解のもとで、アイデンティティを描き出そうとするものであり、民族本質主義を根底から批判するものではなかった」（李 2016：28）と指摘する。

この李（2016）や金（1999）は、アイデンティティ・ポリティクスを意識しながら、オールドカマーの多様性を個別の人間のアイデンティティの葛藤に焦点を当てつつ議論した。金（1999）は第一世代にとっては解放の手段として用いられた「在日アイデンティティ」が第二世代にとっては個の抑圧になっていることを指摘した。その上で、「民族アイデンティティ」と「個のアイデンティティ」のジレンマを超えた「戦術的な」アイデンティティの可能性を検討した。李は現代の在日コリアンのアイデンティティをめぐる実践に関してインタビュー調査を行った。李は、オールドカマーが従来「被害性」を軸とした「大きな」物語から語っていたことに対し、現在では個人の「小さな」物語によって自身のアイデンティティの位置づけを行っていると結論づけた。

それでは、韓国系ニューカマー第二世代の個々の人々は、オールドカマーの若者たちと同様のアイデンティティの葛藤を経験しているのだろうか。韓国系ニューカマー第二世代は、現在を生きるオールドカマーの若者同様に日本生まれ日本育ちが大部分である。ただしオールドカマーと異なり、第一世代である親が主に 80 年代以降に来日しているため、先述の李（2016）の言葉でいう「被害者性」の「大きな物語」を親や周囲の者から必ずしも継承するわけではない。結果的に先述の通りオールドカマーから「他者」

であるとみなされることも、彼／彼女たち自身が「在日」や「オールドカマー」と自身を区別していることもある。他方で、韓国系ニューカマー第二世代は、マジョリティの「日本人」からオールドカマーと同じ「在日」「韓国人」であるとみなざされたり「一枚岩的」に扱われることで、オールドカマーと同様の経験をしている可能性も想定される。このような韓国系ニューカマー第二世代のアイデンティティは、金（1999）や李（2016）が述べるような「民族アイデンティティ」と「個人のアイデンティティ」あるいは「大きな物語」と「小さな物語」といった枠組みで論じることができるだろうか。

本稿では、韓国系ニューカマー第二世代の女性たちの事例から、彼女たちが「韓国人であること」にほとんどこだわりを持っていないように語ること、だが彼女たちが自身のエスニックアイデンティティを意識したり、マジョリティである日本人から「他者化」されたりした経験が全くなかったわけではないことを明らかにし、「帰属にとらわれないようにする」という独自の戦術について提示する。それを踏まえて、この戦術それ自体とこの戦術を論じることにはひそむ「危うさ」について考察し、改めて彼女たちの「帰属を徹底化しない戦術」に目を向ける意義を論じる。それは同時に、オールドカマーの若者のアイデンティティを扱った議論でしばしば触れられつつも、十分に掘り下げられてこなかった側面に光を当てることでもある。

本稿で論じる韓国系ニューカマー二世の「帰属を徹底化しない戦術」は、一見すると福岡・金（1997）の分類に即せば「葛藤回避タイプ」とも近いものにみえる。福岡・金は、「差別されたり悩んだりしたことはないので話すことはない」と語る「葛藤回避タイプ」とは、典型的には、場面に応じて自己規定をスイッチさせつつ、「くよくよ考えずに」「気楽に」生きていこうとする青年たちであるとしながらも、彼らが

文字通りの「無葛藤」とは限らないと注意深く断っている（福岡・金 1997:133）。しかし福岡・金は、「葛藤はない」という語りと「無葛藤」との関係性、そこに潜む問題を深く追究しなかった。本稿が論じる韓国系ニューカマーの自己規定をめぐる戦術は、このようなオールドカマーの若者（2018年現在では3世、4世）の自己規定の「一つの」あり方をより顕著に表出した事例とも考えられる。

I インタビュー

——こだわりをもたないという語り——

本章では韓国系ニューカマー二世代へのライフストーリーに関するインタビューを紹介しながら、エスニックアイデンティティにこだわらない姿勢を取っていることを述べる。

1 インタビューの概要

本稿のインタビューの対象は、韓国系ニューカマーの1.5世と2世の大学生の女性各1名である。二人を選定した理由は、二つある。第一に、1.5世及び2世への注目である。その概念を作り出したのがRumbaut（2002）である。移民の二世代を指す場合、その二世代とは移民の両親が移民先で生み、育てた子どもと考える場合が多い。しかし、Rumbaut（2002）は移民が移民先に移民した年齢に即して1世、1.5世、2世、2.5世の4つに分類した。Rumbautによれば、1世は18歳あるいは18歳以上で移民した者、1.5世は18歳以下の子どもの時に移民した者、2世は両親ともに外国人で移民先の国で生を受けた者、2.5世⁶⁾は両親のいずれか一方が外国人で、

移民先の国で生まれた者—いわゆる「ダブル」である。Rumbautの定義に従えば、2世と2.5世が二世代に相当する。またRumbautの分類を参照しながら学齢期に来日した子どもと日本に生まれ育った子どもではエスニシティに対する意識は異なると指摘した三浦綾希子（2015）は、その育ちの過程に注目するために、Rumbautが主張する1.5世および2世も含めた二世代を研究対象としている。筆者は2015年以降韓国系ニューカマーを中心にオールドカマーも含め「韓国にルーツを持つ若者」に対するインタビュー調査を行ってきたが、Rumbautが主張する2.5世も範囲に入れて調査してきた。調査の過程で筆者も三浦と同様に育ちの過程に注目し、二世代を1.5世と2世⁷⁾を含めて扱う必要性を感じた。日本における在日コリアンの歴史を踏まえると、韓国系ニューカマーの二世代もその対象は多様なものとなる。例えば安本（2013）は、韓国系ニューカマーの二世代に対する母語継承に関して、両親である第一世代にインタビューを行っているが、そこで登場している両親は必ずしもニューカマー同士というわけではなく、親の片方が日本人（つまり子どもは2.5世）であったり、在日コリアンであったりするケースがある。詳細は次節で言及するが、本稿では両親（第一世代）が共に韓国出身である子ども（二世代）に限定し、その育ちの過程に着目して検討することとする⁸⁾。

意味である。Rumbautの何世であるかは当事者の移民時期（または出生時期）によって区分し、オールドカマーに関する区分は来日した1世を基準にしているという点では同じであるものの、例えば2世と3世の結婚など生じた結果として、1.5世や2.5世という区分が生じたという点では違いがある。

7) 筆者の研究全体では2.5世も二世代として扱っている。

8) 現時点では該当者は存在しないが、両親が日本国籍を取得した韓国系ニューカマーも対象であり、あくまでも今回は韓国に「ルーツを持つ」若者の中で両親がニューカマーの第1世代である者を対象としている。

6) Rumbautが使用している2.5世、あるいは1.5世はオールドカマーで言われている1.5世、2.5世などとは異なる。例えばオールドカマーの韓国留学を描いた小説、李（1998）のタイトルは『私が韓国へ行った理由——在日コリアン2.5世の韓国留学記』であるが、ここでの2.5世とは親のいずれかが2世、3世なので、間を取って2.5世という

第二に、この二人は、従来のオールドカマーが行ってきた民族運動のような「社会運動」や「在日コミュニティ」に関わっておらず、言語的や就学上の問題がない、いわば「見えざるマイノリティ」の典型例であることである。今回のAさんとBさんに関しては、後述のインタビューに記載している通り、長い間日本で育っており、今後も日本での居住を希望している。表でも示したとおり、Aさんは韓国の大学に進学するまで人生の大半を日本で過ごし、また韓国学校に通った経験があり、韓国の大学にも通うなど、日本で育ちながら韓国の教育機関を比較的長く経験している。Bさんは後述するが、中学生で来日し、その後日本企業に就職を決めた。

本稿では、個人のライフストーリーを通じて育ちの過程においてどのような経験や出来事がアイデンティティに影響を与えたかを分析することを企図し、半構造化インタビューの形式で実施することとした。以下の表が、インタビューを実施した時点（2017年3月）の協力者のプロフィールである。

表 協力者のプロフィール

対象者	A (2世)	B (1.5世)
出身	釜山→東京	ソウル
母語	日本語	韓国語
現居住地	釜山（長期休暇時は東京）	東京
家族構成	両親、妹、弟	両親、妹2人、弟
親の職業	自営業	会社員
年齢（2017年3月時点）	20	22
学歴	小：日本公立・韓国学校 ⁹⁾ →中：韓国学校→高：日本私立高校→韓国国立大学	小：韓国公立→中：韓国公立→日本公立→高：日本公立→日本私立大学

* Aは1歳の時に釜山から東京に移っている。Bは中学1年生の2学期に来日した。

9) 韓国学校とは主に韓国語で教育を行っている教育機関である。全国にいくつか存在するが、このう

Aさんには2015年4月、9月、11月に複数回に分けてインタビューを行った。Bさんには2016年8月、2017年3月に実施している。Aさんには3回とも釜山市内のカフェやファミリーレストラン、Bさんには東京都内のファミリーレストランやカフェにて実施した。両者とも後日補足的にSNSを通じた追加の質問を行った。時間は、毎回2時間前後を予定していたが、それを越えることもあった。倫理的配慮として、インタビューは協力者に事前に許可を取った上でレコーダーにて録音し、文字化した資料は後日協力者に内容の確認を行った。使用言語は全て日本語で行った。

2 韓国人や韓国を意識しない暮らし

以下では、聞き取り調査の結果、彼女たちのエスニックアイデンティティのありようを考察するうえで、注目すべき事項を彼女たちの語りを通じて紹介する。

(1) 言語環境

日本に居住するニューカマーの言語環境は、教育社会学の分野で議論が積み重ねられてきたが、そこではフィリピン人や日系ブラジル人が注目されてきた（三浦 2015；兎島 2006）。上述の通り、韓国系ニューカマー二世世代の場合、日本語支援が必要な層はかなり限られる¹⁰⁾。

Aさんの場合、両親は共に日本へ留学経験があり、日本語も堪能であるが、基本的には韓国語を話すという。Aさん自身は韓国学校に通っていたこと、さらに後述の通り母国留学もしているため韓国語での会話は十分に可能である。Aさんには妹と弟がいるが、妹は韓国語も日本語もどちらも使いこなせ、弟は聞き取りはでき

ち東京韓国学校は大韓国民団（民団）が設立に関わっており、また韓国政府が運営に関わっている。なお、在日本朝鮮人総聯合会（総連）が運営に関わる朝鮮学校とは異なる機関である。

10) 脚注4を参照。

るものの、話すとき完全に日本語っぽい発音で話すとのことである。しかし、それでも本人曰く韓国語は「完璧ではない」。遡ってみると一時期反抗期があったことを語ってくれた。

お父さんとお母さんは基本的に家の中では70～80%韓国語だったんですけど、やっぱり学校の中では日本語だったから、家の中でも日本語だったんですよ。で、反抗期とかあって親が韓国語を喋らないとうまくならないよ、みたいなことを言ったけど、やっぱり反抗期だったから、日本語で返すみたいな。だから、韓国語で聞いて日本語で返すっていう変な光景が。(2015年9月6日)

韓国学校に通っていた時期、AさんはJ班と呼ばれる日本語主体で授業を行うクラスに所属していた時期がある。韓国学校には韓国語主体のK班もあるが、AさんはJ班のほうが「楽」であったと語る。このことについて、以下のよう

に筆者に語った。

言語から違うから。世界観が違う。今考えてみたら、言語が違うということは世界観が違うということじゃないですか。だから見えないけど、知らないうちに多分幼いからやっぱり同じほう（筆者注・日本語）を求めるんですよ、多分。(2015年11月25日)

このようにAさんは、韓国語は話せても、あくまでも自身の言語的なベースは日本語にあること、また言語が違えば世界観も違うと考えており、K班からJ班への移動は同じ世界観を持つ者たちの班に行きたいという自然な欲求に従ったこと、実際にJ班は「楽」だったと説明した。その後、成長したAさんは韓国の大学への進学を選択した。結果として韓国語をより習得することとなり、父に「韓国の大学に送ってよかった」と言わしめた。ただしAさん自身はあくまでも、言語に関する強い「こだわり」を持っ

て韓国の大学への進学を選択したわけではないという。Aさんには韓国の国立大学の在外同胞の推薦枠があった。彼女は推薦で進学できることを重視した結果、偶然に自分の持っている資源を活用することになったようだ。

Bさん一家は、仕事のために家族で来日したが、Aさんとは異なり、両親は日本語がそこまで流暢ではない。またBさんの弟は日本で生まれていることもあり、韓国語がほぼできない。そのため、家庭内ではBさんが両親と兄弟の言語の橋渡しの役割を果たしている。Bさんも、ひらがなが読める程度で来日したため、漢字はほとんどできず、泣きながら猛勉強して来日1年後には日本人と学習塾で同じ机に並んで学べる程度にまで上達したとのことだ。この間にBさんが日本語を習得する過程では、家族や周囲の友だち、先生などの大きな支えもあったと語る。彼らの支えにより、短期間のうちに確実に日本語を自分のものとしていくことにつながったというBさんにとって「日本語」のもつ意味はAさんとは異なるようだが、「韓国語」が母語であり堪能であることについては特に言及せず、その後も日本の私立高校、大学へと進学している。

(2) オールドカマーへの関心

インタビューでは、日本において「在日同胞」として生活するオールドカマーに関してどの程度関心があるのかを尋ねてみた。さしあたり筆者は二人に「民団（在日本大韓国民団）や総連（在日本朝鮮人総聯合会）を知ってますか？」と問うた。しかし、返ってきた答えは、Aさんが「ちょっとわからない」、Bさんが「それは知らなかった」だった。

民団や総連と特別な関わりを持たない傾向は、第一世代の韓国系ニューカマーに関しても指摘されている（朴 2014:25）が、AさんとBさんはいずれも総連だけでなく民団にもほとんど関

わりを持たない。Aさんは韓国学校に一時期所属していた。韓国学校は設立経緯に民団が関わっているため、Aさんは厳密に言えば、学校への所属を通じて民団に関わっている。だが、学校生活において民団を意識するような出来事やエピソードには言及もなく、実際に積極的なかわりはなかったようだ。その後Aさんは日本の高校に進学している。高校選択の理由は、将来の進路を見据えたものであり、韓国学校の民族教育に対する不満といった韓国学校が持っているエスニックな部分への回避ではないという。Bさんも、「在日の知り合いはいるか」という質問に対しても「探せばいるのかな」と答え、身近にオールドカマーがいる環境ではなかった。二人の生活においては、在日コミュニティやオールドカマーの運動に自ら積極的に参与する機会はほぼ皆無であったようだ。もっとも、オールドカマーの中でも民族学校へ通う子供の数は減少し、先行研究でも指摘されてきた韓国（あるいは朝鮮）を意識する機会は減っているとされる。その意味では結局のところ、在日コリアン全体として自分のルーツに意識を持つ機会が減っていると考えられる。

(3) 韓国「本国」への関心

二人は祖国への関心もさほど持っていないようである。Aさんは筆者がインタビューの中で何気なく尋ねた「韓国の大統領が今誰かってわかる？」という質問に、「今、あの女の人…¹¹⁾」と答えに窮する場面もあった。2012年の李明博大統領（当時）の竹島（韓国名・独島）上陸についても、竹島をめぐる議論そのものを知らなかったとも語った。本国である韓国のことに関しては、いくつか質問をしたが「わからない」や「関心がない」との回答であった。21世紀に入り、日韓関係でオールドカマーとニューカマー

に関係なく、アイデンティティを揺るがす出来事は多く発生し、それに対して在日コリアンが声をあげた事例はよく見られた。これらの出来事（例えば、領土問題）には、ルーツやエスニックアイデンティティより「ナショナルアイデンティティ」の問題に関係するものも多々あった。だが、両者の回答はそのような「国」への帰属意識の言明や「国」に対する関心自体を否定するものであった。結局、両者とも日本での生活が中心であったため、韓国に関する組織や物事には強い関心を持っていなかったという説明は一貫していた。

(4) 日本で生きるということ

二人とも共通して将来に渡って日本に居住する意思があると語っている。ここではオールドカマーの場合にアイデンティティを検討する上で注目された通名と進路¹²⁾の観点から検討を行う。

通名は従来オールドカマーが日本での生活において使用することが大半であった。福岡・金(1997)は、通名と民族名のどちらを使用しているかを調査し、「完全に通名だけ」(35.3%)、「ほとんど通名だけ」(30.3%)、「通名の方が本名より多い」(12.6%)と(福岡・金 1997:77)、8割弱が通名を使用しているという結果を提示している。通名は法的には住民基本台帳法第7条14に規定する政令で定める事項として、住民基本台帳法施行令の第30条の25第1号で外国国籍を持つ者は誰でも通名を役所に届けて設定することが可能である。通名を持つのはAさんの家族である。Aさんは、高校3年生の時に父親の

11) インタビュー実施日は2015年4月1日であり、当時の韓国の大統領は女性の朴槿恵であった。

12) オールドカマーの歴史の中で1970年代にオールドカマー2世の男性が日立製作所へ内定後に国籍による差別で内定を取り消されたという事件がある。裁判の結果、男性は勝訴し、日立を定年まで勤めあげた（詳細は朴君を囲む会(1974)を参照）。この出来事がきっかけとなって、その後オールドカマーを中心となって地方公務員の国籍制限などの撤廃運動にも運動が広がるようになった。

都合で通名を持つこととなった。そのため、高校生の時に行っていたアルバイトでは、通名を使用して働いていたという。通名を使用することで不便を感じていたのは、アルバイトの給料が振り込まれる銀行口座の名義変更についてであったという。それまで持っていた通帳の口座は韓国名であったが、通名を設定したため届け出上の不一致が生じ、変更の必要が生じた。しかしAさんは、特に本名や韓国人であることを隠しているわけではないと語る。後述する「母国留学」の関係で長期休暇を利用して日本に戻る際にアルバイトをすることはあるが、その際にも自分が韓国人であることを伝えることがあるという。むしろAさんは韓国人であることを明かしても特に不便や不都合がないため、通名を「面倒くさい」と感じていると語り、「本当の名前があるのに通名を使うって時点で、なんか韓国を隠しているってのがありますよね」と述べた。生まれてから韓国名で生活し、それに違和感をもつことなく暮らしてきたAさんにとって通名は「面倒くさい」存在なのだ。そこにはオールドカマーで言われてきた「隠す」あるいは「明かす」をめぐる葛藤は存在しない¹³⁾。

Aさんは2017年のインタビュー時点で韓国の大学に在籍中であったが、日本での就職を希望していた。また、Bさんは実際に2017年の春から日本企業に就職を果たした。筆者が「韓国での進路は考えなかったのか？」という意図の質問をしたところ、Bさんは「私は結構物心ついたころにずっとここにいたので、ここになれちゃったというのが一番大きい」と答えた。AさんとBさんの両方とも進路選択に韓国での就職や居住はなく、住み慣れた日本を希望、あるいは既に就職を果たしている。

以上、他の国籍のニューカマー研究で注目されてきた言語環境、従来のオールドカマーの研究で注目されてきた民族団体や運動への関心、通名や就職に関してインタビューの結果を示してきた。ここから明らかなことは、両者とも韓国(人)であることへのこだわりがないように語り、ふるまっていることである。

Ⅱ 帰属するエスニシティを徹底化しない戦術 —「同化」され「他者化」されるということ

前章ではインタビューでの語りから、彼女らが必ずしも言語や民族などに強いこだわりを見せているわけではなく、一見すれば日本社会への同化や適応を果たしたようにみえることを説明した。ただし、彼女たちが自身のエスニックアイデンティティを意識したり、他者から自らとは違う存在として「他者化」されたりした経験が全くなかったわけではない。本章ではインタビューを引用しながら彼女らがアイデンティティの位置づけをどのように行っているのかを検討する。

1 「同化」と「他者化」からの検討

岸(2013)は『同化と他者化』という著書で、マイノリティは「なんらかの社会的できごと」に巻き込まれている」とし、マジョリティは「社会的なできごとと同じような立場で巻き込まれていない人びとに対しては、同じような言い方ではアイデンティティをもっているとはいえない」とする(岸2013:405)。換言すれば、マジョリティがアイデンティティを規定することは難しく、アイデンティティは何らかの出来事が起きないと生じないということだ。岸は、本土復帰前の沖縄から就職のために本土へ渡っていった若者のなかで一度本土へ就職を果たしたにも関わらず、沖縄へUターンしていった者が多数いたことに着目し、なぜそのような現象が起き

13) 民族名を名乗る過程について論考したものに、権・小嶋(2015)がある。在日コリアンにおける名前の意味を検討した論考として酒井(2012)がある。

たかを統計資料や当事者のライフストーリーを通して考察した。それを通じて岸は、復帰前の沖縄において同じ「日本人」であること（同化）を求められるということが、翻って「あなたは違う」という本土へ移住した沖縄の若者の意識を引き起こし、結果として「再一沖縄化」（他者化）を生じさせたことを指摘した。

韓国系ニューカマー二世代の彼女たちに引きつけて考えると、彼女らは沖縄の人々と同様に見た目にはマジョリティと区別されず、それ故に日常的にマジョリティに同化を求められる。マジョリティがオールドカマーとニューカマーを関係なく混同して一枚岩的な視点で「韓国人（朝鮮人）」と見る可能性がある一方、上述の通り日本国内で生活する限りにおいて彼女らは見た目や話す日本語も日本人そのものであり、誰もが日本人であるとみなす。彼女らはマジョリティに自分から「韓国人」だと明らかにし、他者化され、排除を受けない限りは日本人として生きていくことができる。では、日常的には日本人として扱われる、日本社会に同化や適応を求められていることが、韓国系ニューカマー二世代の彼女らにとって、他者化される経験となり、自らの他者性に葛藤したり、あるいは岸の指摘するように翻って韓国への思いを強くすることになっていないようにみえるのはなぜだろうか。次節では、彼らが実際には他者化された経験をもつことについて検討する。

2 他者化されるということ——事例からの検討

(1) 母国留学の経験（Aさん）

母国留学とは、韓国にルーツを持つ者（在外同胞と呼ばれる）が祖国である韓国の教育機関にて韓国語の習得や高等教育を受けることを指す。始まりは1962年に民団が「母国修学」と称してソウル大学語学研究所に11名を送ったことにある。当初母国留学は語学研究所への送り出しに限られていたが、現在では韓国にルーツを

持つ者の韓国の留学全般を指すように変化した。母国留学は李（1989）や李（1998）、鷺沢（2000）などの小説でも描かれる素材である。それぞれの作品では、在日韓国人が本国の韓国人、あるいは日本人と出会い、主人公がアイデンティティの揺らぎを覚えることが描かれている。また、先行研究は数が少ないもの、鄭（2010）がオールドカマーへのインタビューから本国での「言語」と「被差別経験」の経験がアイデンティティ形成に影響を与えることを指摘している。

Aさんは高校を卒業後、釜山の国立大学に在外同胞の推薦枠を活用して入学した。韓国は3月から新年度が始まるため、日本の高校を3月1日に卒業して翌々日には大学の入学式、いきなり韓国語を話し、生活しなければならない環境となった。それは、「パスポート見せる前まで完璧に日本人だと思われてる」Aさんが本国の韓国人から一人の韓国人として認識される経験の始まりでもあった。Aさんは日本語ネイティブである。それゆえAさんが話す韓国語は日本人が話すような韓国語に聞こえる。Aさんは、こうした言語能力の問題から本国の韓国人からの視線が気になっていたという。

もし私が普通の韓国語をしゃべっても、そこにいる10人中10人がこの子普通の韓国人だって思うくらいに、韓国語が上手なら、また変わってくるかもしれないんですけど、やっぱりサークルとかでもそうですけど、韓国語をしゃべらないといけないじゃないですか。で、普通に扱いたい[Mama]に友達とか仲いい子もいるんですけど、なんか韓国人というよりは日本人よりの韓国人としてみているのかなという感じの。（2015年9月6日）

Aさんは筆者が最初にインタビューを行った日、韓国の大学の日本語サークルに「在日としてメンバーに入ってほしい」と言われ、筆者に「私って在日に入りますか？」と尋ねた。この

エピソードを含めて言えることは、Aさんは日本では深くは意識しなかった韓国人からの「他者化」の視線を意識していることである。Aさんが本国の韓国人から「日本人よりの韓国人」と見なされている要素は言語使用の観点及び「在日」という枠組みである。本国の韓国人からすれば、Aさんは「日本人よりの韓国人」であり言葉が完璧であれば韓国に同化できると思われる一方、「在日」という自分達とは異なる存在ともみなされている。換言すれば、日本での他者化（排除）に加え、韓国でも他者であるという意識を受けている（Cf. 윤다인 (2014)）。だが、そこで「韓国人」か「日本人」かというナショナル／エスニックアイデンティティの揺らぎが顕著に生じたというわけではなく、Aさんはその場では「日本人よりの韓国人」というまなざしを「そういうものかな」と受け入れていたようだ。

(2) 他者であるという意識

また、彼女たちは日本社会においてマジョリティからの他者化や排除をしばしば受けてもいた。だが、彼女たちは「深く考えないよう踏みとどまる」という選択も同時にしていた。

Aさんには、中学生の時に2ちゃんねる¹⁴⁾を見たり、ヤフー知恵袋¹⁵⁾へ投稿をしたりした経験がある。彼女の2ちゃんねるに対する発言は以下の通りである。

昔はやっぱり2ちゃんとかそういうの見て、なんか見たらやっぱ中学生の時とかは見たら傷つくの知ってるけど見ちゃうみたい。見て、うわあこういうこと言われてるよみたい。だけど、今は別になん

か。(中略) 社会でのストレスをその2ちゃんに吐いて、それで気分が楽になってるんだったらそれでいいんじゃないかなって (笑) (2015年9月6日)

また、ヤフー知恵袋では「なんで2ちゃんであんな人たちが韓国人に騒いでるんですか？って。チョン¹⁶⁾ってなんですか」という質問をした経験もあるという。回答は多種多様で優しいコメントをする人もいれば、強い言葉を浴びせるようなコメントも存在していた。しかしAさんは「これが社会なんだ」と感じ、現在は2ちゃんねる等を見たり質問したりすることはしなくなったと語る。

Aさんのケースは自分が帰属しているエスニシティがマジョリティから偏った視点（の他者化）から見られているというケースであるが、逆に好意的に他者化されたケースもある。Bさんは、次の経験を語った。

私、高校はマックでバイトしてて、その時は名前（筆者注・ネームプレートのこと）がついてた。一回だけ、韓国すごい好きなんだよねということ言われたことあるけど… (2016年8月24日)

この日本人は、Bさんのネームプレートを見て、Bさんが韓国人であると認識し、それで「韓国すごい好きなんだよね」と言ったと考えられる。それはBさんに対してではなく韓国に対するものであるが、Bさんは少なくとも他者化を自覚したと思われる。ただし、だからといってBさんは、韓国に対する好意的な（否定的な）関心を強めたり深く考えることにはならなかった。同じようなことは他にもある。例えば、筆者がBさんに日韓の歴史についてそれぞれの国の学校でどのくらい勉強をしたのかを質問したところ、彼女は最初「歴史に興味がない」と答

14) インターネット上の大型掲示板サイト。2ちゃんねるは、Aさんが傷つく可能性になると指摘する「嫌韓」言説が生み出される温床ともなっている。
15) Yahoo!Japanが運営するネット掲示板サイト。投稿者が質問を投げ、それにヤフーの会員が回答する、という手法を取っている。

16) 日本社会における韓国人（朝鮮人）に対する蔑称のひとつ。

えた。しかし、インタビューが進むにつれ、二つの国で歴史教育を受けて「日韓それぞれの言い分を聞くうちに嫌になった」と語り、結果として興味を持つこと自体をやめたと説明した。こうしたAさんBさんの他者化の経験に関する語りは、日本（人）か韓国（人）のどちらかの立場に寄せて自己規定をすると生きづらくなる、あるいはどちらの立場も強く意識しないほうが生きやすいことを実際に経験してきたからこそ、国にしる民族にしる、自身が帰属するアイデンティティをなるべく意識しないようになった可能性を示唆している。

本章ではインタビューを通して彼女らがどのように「同化」や「他者化」の経験に接したのかを見てきた。共に他者化（や排除、あるいは疎外）を経験し、自己形成の過程で何らかの影響は受けたと考えられる。しかし、彼女たちはそれを気にしていないように語る。Aさんの「それで気分が楽になってるんだったらそれでいいんじゃないかな」という発言が象徴的である。このような彼女たちの対応は、従来のマジョリティの文化や習慣に吸収される、あるいは日本社会の枠組み（Aさんの場合は母国留学まで含めても）で生活する中でアイデンティティに葛藤が生じることを前提とした福岡・金（1997）の「葛藤回避型」では捉えられない部分があると考えられる。彼女たちは、「くよくよ考えず」に「日本人」と「韓国人」をその場その場でうまく切り替えるといった、どこか積極性を感じる対応（戦略）すらもなるべくしないようにしているようにみえるからだ。むしろAさんもBさんも自らのアイデンティティについて考える機会そのものを、「面倒くさい」「興味がない」「これが社会なんだ」と済ませる「戦術」を駆使してきたのではないだろうか。これ以上、踏み込むと「面倒である」「嫌な思いをする」「混乱する」可能性があることを取って流すという選択もひとつの生き方である。ここでは、それを「帰属

するエスニシティを徹底化しないという戦術」と呼びたい。

おわりに——帰属するエスニシティを徹底化しないという戦術——

本稿では「見えざる2世」とされる韓国系ニューカマー第二世代のライフストーリーから、韓国人であることにこだわらず、同化や他者化を意識する場面が生じて、それに深く与しない語りを検討してきた。そして、自分のアイデンティティを揺るがすような出来事が生じてそれを取って深追いしないことを、本稿では「帰属するエスニシティを徹底化しないという戦術」と名付けた。

ここで冒頭に立ち戻って議論を整理したい。オールドカマーのアイデンティティに関する実証研究においては、エスニックアイデンティティをどう守っていくのか、どう維持していくべきか、あるいはどのように葛藤に折り合いをつけたり、うまく回避していくかが問われてきた。しかし、本稿で見えてきた同じルーツを持つ彼女らの姿からは、自らのアイデンティティにおいて葛藤や判断を必要とする物事全般をやり過ごしていくことで、葛藤が生じること自体をないことにする、葛藤の源になりうるものの存在に関心をもたないようにするといった戦術があるように思われる。

セルトー（1987）によれば、「戦略」とはなんらかのはっきりとした敵が存在して、それに対して独立を保ちながら築いている力関係の計算である。一方で「戦術」とは自分に何かあるわけでも、相手との境界線があるわけでもないのに計算をはかることである（セルトー 1987:25-26）。換言すれば「戦略」は何か明確なターゲットがあって、それに対して対応していくこと、「戦術」はその場その場の雰囲気によって勘や分別のような形で対応することである。翻ってオー

ールドカマーの研究で指摘されてきた「戦術的」なアイデンティティは、「葛藤」の存在を前提とする「戦略的」なアイデンティティの側面を有している。「日本（人）」「韓国（人）」といった区別や、「大きな物語」と「個人の物語」といった区分は、「私は何者か」を追求する／問う「主語」のある説明図式を前提としている。だが彼女たちは「私は何者か」を追求する「主体」とならないようにする戦術を採っているようにみえるのだ。

もちろんこのような形で研究者が研究する対象者の自己規定のありかたを「戦術」として取り上げ、あたかも「彼女たちには葛藤がない」「うまく生きている」と論じることには、批判があるだろう。例えば、セルトーの戦術と密接に関連する日常的抵抗論への批判として松田素二(1999)が述べることと同様に、「面倒くさい」「興味がない」「知らない」とやり過ごす戦術を評価することは、マジョリティが彼女たちを「在日」としてみなしたうえで差別や偏見の構造、彼女たちにそうした戦術を採らせる社会の不寛容さを神秘化（不可視化）してしまう危険性があるし、韓国系ニューカマー二世世代の多様性、ひいては「在日」に限らず日本社会において「やり過ごせない」状況に置かれた者の葛藤や困難を見過ごすことにもつながりうるだろう（cf. 松田 1999:7-11）。「面倒くさい」「興味がない」「知らない」とやり過ごしてしまう彼女らの語りには「在日」とみなされるがゆえに生じる社会的な背景もある。それははじめにでも言及した今を生きるールドカマーの若者たちの自己形成と共通しうる側面ではないだろうか。

実際に、彼女たちの「敢えて」興味を持たない、深く追究しないという態度が主体的な戦術であるか、そうせざるを得ない社会的状況によるものなのかは明確には区別し得ないし、状況に応じては「そうせざるを得ない」、すなわち彼女たちが主体的にそのような戦術を採っているのだ

はなく、状況がそのような戦術を採らざるを得なくしている側面が顕著にたち現れるだろう。Aさんは、それを象徴するようなエピソードを韓国にて経験した。Aさんは韓国の大学で友人に頼まれて「在日」として、「日本で差別を受けた」というシナリオに沿った発言を前提としたインタビュー動画の出演に応じたことがある。Aさんは、その時にインタビューに答える自身をあくまで「演技」と捉えてやり過ごしたと語ったが、その役割規定には大きな違和感を抱いたようだ。また、「いまだ」遭遇していないだけで、彼女たちが曖昧にやり過ごす戦術を採ることが難しい場面もあるだろう。例えば、日本における韓流ブームやヘイトスピーチなどの動きはその時の日本人の韓国系ニューカマーを含めた「在日コリアン」に対する意識を大きく左右する。例えば、Aさんが2ちゃんねるやYahoo!知恵袋で質問したような排外主義的な人物に口頭で攻撃されるといった事態で、「これが社会なんだ」で済ませる「戦術」がどれほど可能なかは不明である。日本における対韓感情の状況次第で、ールドカマーの若者と同様に、韓国系ニューカマー二世世代も在日コリアン全体の中でバランスを取ることを余儀なくされることもある。このような意味で彼女たちの「帰属するエスニシティを徹底化しない戦術」は、常に彼女たちの主体的な戦術とはいえず、またいかなる場面でも可能であるとは限らないという意味で「危うさ」「不安定さ」を伴っている。

だが同時に本稿から見えてくることは、日本（人）か韓国（人）か、あるいはールドカマーとの比較といった枠組みで、本人たちに帰属するアイデンティティを問うていくことにもおそらく問題があることである。筆者も「在日」をめぐる問題を踏まえて何らかの葛藤が生じているはずだという前提の下で、既存のールドカマー研究を参照しながら、半ば無意識的に彼女たちに筆者が措定した枠組みで帰属の枠組みを

意識化させるインタビューを試みてしまった¹⁷⁾。それは筆者自身が彼女たちに、ふだん意識していなかった「他者化」の契機を与えることになったともいえる。逆に言えば、「帰属を徹底化しない戦術」は、筆者のような研究者がインタビュー等において調査対象者に半ば無意識的／無自覚的に「他者化」を意識させることに対して、彼女たちが「日本」／「韓国」、オールドカマー／ニューカマーといった枠組みを「外してみせる」戦術でもあるといえる。

謝辞

本研究は立命館大学生存学研究センター「現代社会エスノグラフィ研究会」への助成を一部活用して実施した研究成果です。また、AさんとBさんにお礼申し上げます。

引用文献

- ミシェル・ド・セルトー（山田登世子（訳））（2007）*日常実践のポイエティック*。国文社。
- 福岡安則（1993）*在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ*。中公新書。
- 福岡安則・金明秀（1997）*在日韓国人青年の生活と意識*。東京大学出版会。
- 今里基（2018）非当事者として聞き取り調査をすること—ある日韓ダブルのアイデンティティの事例から—立命館生存学研究，（1），53-61。
- 金花芬・安本博司（2011）*コリア系ニューカマーの教育戦略：韓国人と朝鮮族の学校選択と家庭内使用言語を中心に*。人間社会学研究集録，6，27-49。
- 鄭幸子（2010）*韓国社会と在日韓国人2世，3世のアイデンティティの変容における一考察：韓国留学経験者を中心に*。東アジア研究，54号，61-78。
- 金泰泳（1999）*アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ*。世界思想社。
- 岸政彦（2013）*同化と他者化—戦後沖縄の本土就職者たち*。ナカニシヤ出版。
- 児島明（2006）*ニューカマーの子どもと学校文化*。勁

草書房。

- 権静香・小嶋秀幹（2015）*在日コリアン青年の名のり行動形成に伴う心理のプロセス*。福岡県立大学心理臨床研究，7巻，31-42。
- 是川夕（2012）*日本における外国人の定住化についての社会階層論による分析 - 職業達成と世代間移動に焦点をあてて -*。ESRI Discussion Paper Series, No.283, 1-30。
- 李良枝（1989）由熙。講談社。
- 李洪章（2016）*在日朝鮮人という民族経験—個人に立脚した共同性の再考へ*。生活書院。
- 李淳美（1998）*私が韓国へ行った理由—在日コリアン2.5世の韓国留学記*。国際通信社。
- 松田素二（1999）*抵抗する都市 ナイロビ移民の世界から*。岩波書店。
- 三浦綾希子（2015）*ニューカマーの子どもと移民コミュニティ—第二世代のエスニックアイデンティティ*。勁草書房。
- 朴貞玉（2010）*日本におけるニューカマー韓国人にとっての理想の子ども像 東京韓国学校に子どもを通学させる親の文化選択志向性を中心に*。日本學報，第85輯，233-245。
- 朴正義（2014）*大久保コリアンタウンの人たち*。国書刊行会。
- 朴君を囲む会（1974）*民族差別—日立就職差別糾弾*。亜紀書房。
- Rumbaut, R. G. (2002) *"Served or Sustained Attachment? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigrant Generation"*, *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*. Levitt, P. and Waters (ed.) M.C. New York: Russell Sage Foundation.
- 酒井はるみ（2012）*在日韓国人の名前の名乗り方*。茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術），61号，31-39。
- 鷺沢萌（1997）『君はこの国を好きか』。新潮社。
- 志水宏吉・清水睦美（編）（2001）*ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる*。明石書店。
- 山脇啓造（2000）*在日コリアンのアイデンティティ分類枠組に関する試論*。明治大学社会科学研究所紀要，38（2），125-141。
- 安本博司（2013）*韓国人ニューカマーの母語継承に關する考察—在日との接触と意味づけの変遷に着目して—*。人間社会学研究集録，8，89-109。

17) この点に関する気づきは今里基（2018）にて詳述している。

安本博司 (2016) 民族性継承への意味づけ：在日と韓
国人ニューカマーに着目して. 女性学研究, 23,
131-153.

윤다인 (2014) 『모국수학이 제일동포의 민족정체성에
미치는 영향에 관한연구』 서울대학교 대학원 사
회학과 2013 년도 석사논문 (=尹ダイン (2014) 『母

国修学が在日同胞のエスニックアイデンティティ
に与える影響に関する研究』ソウル大学大学院社
会学科 2013 年度修士論文).

(受稿日：2017. 12. 1)

(受理日 [査読実施後]：2018. 7. 3)

Original Article

T Tactics of Undefined Ethnicity among the Second Generation of Korean Newcomers in Japan

IMASATO Hajime

(Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University)

In Japan today live nearly 500,000 *zainichi* (Koreans residing in Japan), of whom about 150,000 arrived in Japan after 1980. They are called “Korean newcomers,” and their children have been born and grown up in Japan. Previous research on *zainichi* identity has mostly focused on how previous arrivals protect or maintain their ethnic identity. This paper discusses strategies of identity self-specification in the second generation Korean residents in Japan, through their broader life stories. I interviewed two young female university students who are second generation Korean residents in Japan, and analyzed their oral history. It was found that even in cases where they experience “othering,” i.e., they were made to feel alienated from the majority in Japanese society, they did not allow it to disturb them too much. This paper termed this tactic as “the tactics that do not hold on defined ethnicity.” This study found that the young newcomers have maintained the same roots in Korea as those whose families have been in Japan for several generations, but the former keep their distance from the defined nationality and ethnicity of the latter.

Key Words : newcomer, identity, tactics, Koreans in Japan, second generation
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.38, 15-29, 2019.
